勤務したるを以て、新知三百石を受けた。

トダシノ　燈臺笹　能美郡山上郷に屬する部落。その出村に藤藏があり、石川郡中に飛地となつてゐた。明治中に至り藤藏を獨立部落とした。

トダシノアカラジマ　燈臺笹明島　能美郡山上郷に屬する部落。一に舟場島村ともいうた。但し同郷上清水・下清水・田子島三村に入會となつて居る。

トダマサクニ　戸田方邦　通稱靱負・彌五左衞門。前田利常に仕へて三百五十石を受け、使番となり、後足輕頭に任じ、正保三年歿。その妻は前田慶次利太の女で、二男二女があつた。長子七郎兵衞家を嗣ぎ、次子伊右衞門兄の後を受けたが、子孫斷絶した。又女子の一は長谷川安入に嫁し、一は今井と稱して年寄女中になつた。

トダマサスケ　戸田方副　通稱齋宮・靱負・治兵衞。方德の子。父の遺知七百石を襲ぎ、持筒足輕頭・魚津在住組頭並を經、安永二年馬廻組頭に昇進し、七年閏七月十九日六十一歳を以て歿した。

トダマサノリ　戸田方德　通稱靱負。初諱重政。實は津田宗七郎の子であつたが、戸田小源太の後を襲ぎ、遺知三百石を受けた。後祿を增して七百石に至り、寄合組・持弓足輕頭・馬廻頭を勤め、寛保二年八月廿三日六十九歳を以て歿した。

トダモリカツ　戸田守勝　通稱與一郎。清太夫勝武の養子。初め新知二百五十石を以て大小將となつたが、享保九年家督六百石を襲ぎ、職次第に進んで定番頭兼御近習頭に至り、安永三年五百石を加へ、人持組に列し、五年致仕して三百五十石を受け、柔同と號し、八年十月七日七十七歳を以て歿した。

トダユキヘ　戸田靱負　美濃大垣藩戸田采女正の支族で、本多安房守政重に關係があつたから千石の合力を受け、後に暇を得て退去したと云ふ。元和二年十二月本多政重から書出した家人武功取調書に、『千石戸田靱負、本國三河』とあるもの是である。

トダヨイチロウ　戸田與一郎　初めて前田利常に仕へて六百石を領し、聞番・御先筒頭に任じ、貞享二年歿した。子孫相繼ぐ。

トダヨシカツ　戸田善勝　通稱千三郎・五左衞門。初諱就將。與一郎守勝の次子。明和九年新知百三十石を賜ひ、組外に列し、御近習となり、表小將に轉じ、諸職を經て文化五年五月二十石を加へ、遂に大組頭に至り、文政八年十二月致仕した。

トチノキ　栃木　鳳至郡櫛比庄に屬する部落。

トチヲ　栃尾　河北郡湯涌郷に屬する部落。

トヅ　戸津　江沼郡能美境に屬する部落。永祿十一年撰の反故裏書に、『加州粟津へ頓圓越給ひ、戸津といふ所に住坊あり。』と記する。戸津は能美郡粟津の隣邑である。

トツアンドウニヨ　訥庵道如　金澤曹洞宗天德院二十代の住持。天保三年八月十四日示寂。

トヅガマ　戸津窯　江沼郡戸津に古窯址の跡が二ヶ所あつたことは江沼志稿に見えて、その陶器を戸津燒といふとあるが、窯址は今知られない。

トツサキ　突崎　鳳至郡鵜川の部落南方の岬。

ドド　百々　江沼郡山中谷に屬する部落。茇憩紀聞に、昔この村領に沼があつたのを、二百石の田地に開いたから、百々の名が起つたとある。同書に、此の領に熊坂城主の臣影山新右衞門・石塚傳次の屋敷跡、及び寺屋敷跡があるとも記される。

トドノミヤ　鮒の宮　珠洲郡鹿野（今野々江）に鎭座し、今菅原神社と稱する。能登名跡志に、『氏神天滿宮は靈社にてとゞの宮と云。鮒といふもの海中より詣るとて、鮒濱とて除てあり。併渡唐の云ひ誤りにや。御神躰は渡唐天神の由。』と記する。

ドドメキバシ　百々女木橋　金澤小立野の橋名。舊傳に、昔この地山中の曠野であつた頃、樵人の通行の爲に架けた丸木橋であり、橋下の巖石に激する瀨の音がとゞめき渡つたから橋名となつたといふ。

ドドメキマチ　百々女木町　金澤の町名。元祿九年の地子町肝煎裁許附に、『どゞめき近所地子町』とあつて、どゞめき町の名はどゞめき橋の名から起つたものである。享和三年幕府へ進達の町名書には、轟來町とある。

トドロキ　轟野　石川郡末松の小字に轟があり、そこの附近を轟野と稱して、狐狸の怪などがあつたといふ。

トドロキノハシ　轟の橋　金澤橋梁記に、『轟の橋、淺野川大橋の事。』とあり、口碑にも淺野川大橋の古名を轟の橋といふと傳へるが、舊記には全く所見がない。

トドロブシ　とどろ節　鳳至郡總持寺五院輪住の晋山式後酒宴の席で唄はれた俗謠。歌詞は『能登の總持寺すぢかひ橋を死なぬ一期に渡りたい』といふの外殘存するものがない。とどろ節といふ名義も明らかでない。

トナミヤマ　礪波山　加賀と越中との國境に在る倶利伽羅山附近の山脈は、礪波山又は利波山とも砥波山とも汎稱するもので、山勢概ね卑小、數條の徑路によつて之を横斷する。故に加賀と越中との兩勢力が互に爭ふ時は、或は之を突破し、或は之を防禦することを要した。天正十一年には前田利家鳥越に築き、十二年又朝日山に堡して佐々成政の侵入を防がうとした如き、皆この山脈の軍事上必要なるに因るものである。若しそれ倶利伽羅峠に至つては、高さ二七七米で、古來北陸道の通過する所であるから、靈永二年平軍の猿ヶ馬場に陣した時には、源義仲一蹴して大勢を決し、承久三年北條朝時は之を經て入洛の途を開き、天正十二年には佐々成政こゝに壘を築いて南進の機を窺うた。

トニユウ　斗入　→ムラトニユウ　村斗入。

トネ　刀禰　珠洲郡高屋の舊家。延寶元年の書上に、『高屋村刀禰と申者、他人より續不申候由、四十代相續仕候。役行者の布直垂所持仕候。毎年正月朔日石動山の衆徒、刀禰方へ參候而祭事仕候事。』とあり、又能登誌には、『刀禰といふ古き百姓あり。むかしより石動山へ由緒有て、泰澄大師の衣とて代々持傳へり。今の衣とは大に異成物なり。』と見える。刀禰は古く村肝煎の類であらう。

トネマス　斗根升　→トノコマス　斗子升。

トノ　殿　鹿島郡北三郷之内中山郷の内に屬する部落。

トノガイケ　殿ヶ池　白山の舊市ノ瀨溫泉からする登路中で、御苗代・畜生谷・ふくべ池を越えた所にある。小泉に過ぎぬが、水色藍を